

---

# 命の代償+

くるる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

命の代償+

### 【Nコード】

N0973M

### 【作者名】

くるる

### 【あらすじ】

『命の代償』原作から9年後。高校生になったコナン達「探偵クラブ」は、夏休みに海へ旅行する事になった。最近になって灰原と恋人同士になったコナンだが、とある未遂事件から灰原と気まずくなくなってしまっていて。コナンはなんとか仲直りしたいものの、打つ手がないまま夜となり……。

『side哀』上記の哀目線となります。なので結末は一緒です。

『命の代償』はもともと短編だったので描写のほとんどをカットしました。そうした穴の補完や、私的黒の組織観を出せればと思いま

५.

## 命の代償 ？（前書き）

死亡フラグなタイトルですが誰も死にません。事件もありません。

ただ、10年間のエピソードをいくつか捏造しています。

コ哀が苦手な方はBACKお願いします。

## 命の代償？

(あいつどこ行ったんだ?)

バーベキュウの最中にいなくなった灰原を気にしたら最後、見つけ出さなければ気が済まなくなってしまっていた。

思えば最初からあいつはおかしかった。

海に行くのも嫌がったし、期待してた水着は買いもしなかったようだし、ずっとご機嫌斜め。

そんなに俺と一緒に嫌か。

とも思ったがそれもどうやら違うようだ。

だったら理由をはっきりさせるべきだろう。ついでにここを逃したら仲直りも難しい気がする。

そんな事もあってコナンは目下灰原を捜索中である。

…

……

……

……… あっ見つけた。

昼間の浜辺の隣にある小さな砂浜。その波打ち際近くに小さく座っていた。

満月手前の上弦の月が、夜の暗い海に淡い真珠色の絨毯を敷いている。

「灰原」

「あら、どろしたの？」

月と海に振り返る浴衣の佳人。コナンは一瞬、ここに来た理由を忘れた。

「ど、どうしたのって……それはこっちの台詞だぜ。今日だって海にも入らなかつたし、どうしたんだよ？」

「別に泳がないのは今に始まった事じゃないわ。ここ数年は水泳の授業も見学だからね」

授業も出てなかつたのか？

クラスも違つたし、中学からは男女の体育が別になっていたから知らなかつた。

「え、授業も？どうしてだよ？」

その率直な疑問に灰原は眉間に皺を寄せた。それから盛大な溜息を漏らす。

灰原はコナンには気付いて欲しいと期待した自分に少しだけ苛立つた。

だが、考えても見れば、この男は事件や物証がないと人の内面に気付けない。特に複雑な感情に至つてはこの上なく鈍感なのだ。それに自分が勝手に逃げておいて期待だけするのも虫のいい話だ。決定的に嫌われる事になるかもしれないけど、今のままも辛いし仕方ないか……そう思ったのが後半の溜息に繋がる。

「仕方ないわね……教えるわ」

すっと立ち上がった灰原はコナンの手を取った。灰原の白い手は夜

の砂のようにひんやりとして、心地よかった。

その間、話の内容についてはまったく考えていないから何も分からない。

だが、次第に灰原が岩場の影を目指していると気が付いて、コナンは焦った。

アレ？えーっと何を教えてくれるんだっけ？

まさか……！

恋人になった。デートしたし、キスもした。残るはあと1つ……。

まさか、それを覚悟しての不機嫌だったのか！？

前後の脈絡を考えればその確率はあまり高くないのだが。

それでも手を掴む指の柔らかさに今更のように気付き、胸を高鳴らせた。



岩場について、ようやく灰原が振り返った。コナンを海側に立たせ、彼女は月明かりを浴びて、表情の隅々まで眩しいくらい見える。だが、どう見てもこれから……という雰囲気ではない。

始終悶々としていたコナンだったが、その表情の重さに身構えた。

「私が機嫌悪く見えたなら謝るわ。でも水着を着たくない理由と……それとあの日、あなたを拒んだ理由を……」

あの日と聞いて苦い思い出がよぎった。

あの日というのは、先週の事だろう。

博士は帰って来ないわ

デートの別れ際。

今まではそんな言い方をしなかったから、ちょっと調子に乗ったのかもかもしれない。

誘った返事も聞く前にキスをして、抵抗もされなかったからそのまま続けようとした。だが、服に手をかけた瞬間。急に激しい抵抗に遭って拒絶されたのだ。

それが初体験となる予定のコナンは解せぬ女心に思い悩んで、お互い気まずくなっていたが……そういえばアレの時も水着も露出が高くなる点が共通しているな……。

と、様々な考えを巡らせたが、コナンが待っても彼女は口を開こうとはしなかった。

代わりに帯を解くと、スルリと下着しか身につけていない全身の肌を露わにさせた。

「え、おい……！」

何やってんだ。

そう言おうとした一瞬後、コナンは全ての理由を悟った。

この海よりももっと冷たくて暗い、深海に頭から突っ込まれたような気分だ。

「よく見て、工藤君。これが理由よ」



## 命の代償 ? (後書き)

大体この話はあと4話か5話で完結する予定なので、頑張っ  
てもいいものになりたいと思います。これからもよろしくお願  
いしま  
す。

命の代償 ？（前書き）

エピソードをがっつり捏造しています。

命の代償？

「よく見て、工藤君。これが理由よ」

わざわざ指で指さなくてもよく分かる。

大きく分けて1つは体中ある小さな傷跡達。これはAPT-X4869の関係で随分小さくなっているからまだ言い訳は出来るのかもしれない。

むしろ眼につくのは、左の鎖骨の下と右の太ももにある傷跡。焦がしたピンク色とそこを塞ぐべく無理やり集められたように波打つ皮膚の皺。月の薄光を浴びてますます白く輝く肌にそこだけが異質なものを放っていた。

銃創だ。

「闇と関わったものだけが宿す烙印。消せない悪しき過去。平和な日本じゃ特にそうでしょ？」

たかが銃創と思うかもしれない。弾頭や口径、距離次第では、事故などで負う怪我のほうがよく似たものもあるかもしれない。事件を乗り越えても刻まれた傷は残り、それが新たな心の傷を生む点も同様だ。

だが、銃創は他の傷とは持つ意味が若干違う。特にこの国では銃創で表の病院に行くと、それだけで大事になる。銃を入手できた加害者と、その加害者が殺意を抱くような間柄の被害者や事情が存在する可能性があるからだ。灰原が言いたい事はそういう事だった。

「……………」

「あなたやあなた達には見られなくなかったのよ。傷物の醜い体を」  
視線が彼女の傷に吸い込まれたように動けない。

「だから、あなたが私を好きだと言ってくれた時は嬉しかったのよ。普通の人ならこんな傷を持つ女、誰も抱こうなんて思わないでしょうからね。その過去まで知って想いを寄せてくれて本当に嬉しかったです。」

でもあの日は…………もし、蘭さんと比べられたらって急に思ってた。それが怖くて逃げてしまったの」

その告白に、コナンは木槌で頭を殴られたような衝撃を幾度も受けた。

なんて馬鹿なんだ！

それから激しく自分を呪った。

ここ4年間、灰原はずっとあの傷に悩まされてきたのだろう。

気付けたのは俺だけだというのに。一度も気が付かなかった！

「……でも逃げてからはあなたを裏切った事が怖くて……自分勝手だったわ。ごめんなさい」

だというのに、こいつは自分ばかりを責めて……！

「志保！」

その傷の発端は俺にあるのによ！

そう思ったら抱き寄せるまでは止まらなかった。

熱に浮かれた病人が氷を求めるように、冷え切った彼女の体を強く



抱きしめた。

「く、工藤君？」

灰原は何故自分が抱きしめられているのかわからずにキョトンとした。大事な時にしか呼ばない名前を叫ばれた理由もわからないに違いない。

その反応が既に末期的で、より一層の悔しさを掻き立てる。

己の体を醜い傷物と言いつつ切った灰原。

多分、鏡を見ても傷にしか目が行かないくらいに悩んでいたのだろう。

俺は一瞬の間、彼女の美しさしか見えなかったのに。

「もう止める！」

「何を？」

「自分を責める事だよ！それにな、その傷は烙印なんかじゃない」

その言葉に灰原は目の色を変えた。

「何言っているの？闇に生まれ、闇に汚され、闇に傷つけられたからこそ残る証じゃない。現にこの傷のせいで普通の生活すらも出来やしない！これのどこがただの傷よ！？」

「だから、その傷はそんなんじゃないやねえって！」

「何が違うっていうのよ！」

「……この傷が俺を守る為に出来たものだからだよ。あの日、ジンに銃口を向けられて、流石にもうダメだって思った時にオメーが身を盾にしてくれた。

でも代わりにオメーが撃たれて。

俺は後悔とか感動で泣きそうなくらいぐちゃぐちゃになってよ。

とにかくオメーが死んじまうんじゃないやねえかって怖かった。でも、オメーは俺が無事なのを見て微笑んでくれたんだよ。あんな綺麗な人の顔は見た事がなかった」

「……………」

息を吸い込む音が耳元で聞こえた。

灰原が話を聞いてくれていているのを感じて、コナンは灰原を開放して一歩分離れた。

柔らかな彼女と離れるのは勿体ない気もしたけれど、躊躇いはない。

正直途中から自分で何言っているか分からなくなったが、それでも想いのままぶつけて、彼女がどんな表情を見せるかを知りたかったのだ。

「オメーが俺を助けてくれたから、俺は今生きていて、オメーを好

きになった。だからこれが烙印なんて俺は認めねえ……これは…

「……………」

「これは……き、絆だ」

「……は？」

一瞬の間の後、吹き出した灰原にコナンは顔を真っ赤にした。正直言って自分も苦しいのは自覚していたから余計に辛い。顔を見たくて離れた筈のコナンは、真っ赤になった自分の顔を隠せなくて慌てた。それを知ってか知らずか、灰原は見た事ないくらいに大笑いした。

「笑うなよ」

「アハハハハ。絆って、もっと他になかったの？」

いつもは気障な言い回しばかりするのに。と、灰原は笑い続けた。

「う、うっせーな。悪い方にはっかり考えるなって言いたかったのに……そのもし、その傷で生活に支障があるなら、俺がいくらでも支えてやるし……だから、笑うなって！」

「しめんなさい」

ようやく笑いを収めた灰原だったが、笑いすぎて瞳には涙まで浮かべている。

「でも、そうね。確かに悪い方に考えすぎたわ。こんな傷でもよく考えたら今私が生きている命の代償みたいなものなんだし」

「おい、それを言うなら俺の命だろ？」

「あら、同じ事よ」

「へ？」

何を言うのだろうか？そう思った所に、彼女ははにかみながら

「あなたなしには生きていけないから」

極上の爆弾を放り込んだ。



## 命の代償？（後書き）

前回に続き、終わりのきりが悪くてゴメンなさい。

哀に関しては言動と思惑が違う場所が出来てしまったので、いつか side 哀も書ければなと思います。

### 【注意】

念の為に申し上げますが、私は「銃創がある人」は「文中の記述に当てはまる」というつもりでは書いていません。作中の彼女であれば自らの傷をこう捉えるかもしれないというだけです。もう他の人物の言葉や本文の説明に関しても同様です。かといって銃創以外の傷が大した事ないと言った訳でもありません。ご理解よろしくおねがいします。

## 命の代償？

「あなたなしには生きていけないから」

「灰原……！」

はにかんで微笑む灰原に、顔はカーツと熱くなった。これまでも真っ赤だったのに、顔の血管が千切れそうだ。

灰原は馬鹿笑いの涙で瞳が潤んでいる。その瞳の輝きに体が縮むんじゃないかってくらいに胸が高鳴った。

ちくしょう。

「絆」であんなに笑った癖に。「命の代償」なんて言うから馬鹿にしてやるつもりだったのに。

そんな殺し文句持って来るか普通……？

正に殺し文句だった。

ぶっ殺されたのはリセイ。

引っ手繰るように抱きしめた。さっきよりも温かかった体温も、野性をますます暴走させ、頭脳を焦がした。

そのままキスしようとして、ふと考え直すと、身を少しだけ屈めて、彼女が忌み嫌い続けた銃創を正面に見据えた。

「?」

だいたいよ。傷を見て俺がオメーを嫌いになると思っただったら、まだ分かっていないぜ。

だから教えてやるよ。俺はオメーの外見に惚れた訳じゃねえ。中身でもねえ。オメーに惚れたんだってな。

それもオメーが嫌い尽くしただろうこの傷すら、愛おしく思えるくらいに。

とか、色んな事を思いながら、そっと唇で触れた。

「あっ………ちよっと!」



僅かに身を硬くした灰原に慌てて唇を離すと顔を見上げた。

「痛かった？」

「平気だけど……」

「どんな感じ？」

「変態。恥ずかしいだけよ」

戸惑いながら返す言葉がいちいち刺激する。

こいつは俺の理性を破壊し尽くしたいのだろうか？

いよいよ遠慮を捨てて、傷へのキスを何度も浴びせた。

それに応えるようにピクリと体を震わす姿に、心の炎はますます燃え上がった。回された腕に背中を驚づかみにされてもかまわない。

さっきのような吐息をもっと聞きたくなって、唾液をまとった舌でそっと突いて、大胆になぞった。

「ん……ッ……」

漏れる吐息に交ざる幽かな声。

息が持たなくなつて顔を離すと、驚いた。冷静に考えれば当然だが、絹のような肌が羞恥に染まっていた。思わず呟く。

「かわいい」

「馬鹿」

ポフ。

頭を叩かれた。今までは見えなかったが、灰原の顔もびっくりする位に熱を帯びている。

「なあ、この前の続きしてもいい？」

「……………」

灰原は赤らめた顔で黙ったままだったが、やがて少しだけ頷いた気がした。

どの道止まる気なんてなかったから、それを肯定と受け取って。

それから、まだしていなかったキスをしようと、顔を引き寄せ…………。

「おい、コナン、灰原、どこだー！花火だぞー！」

そんな胸間声を合図にお互いバツと飛びのいた。

元太だった。

すっかり忘れていたが、今は「探偵クラブ」で旅行中なのだ。

それにしても……

あ、あんにやろー殺す気か!!

狂った鼓動を刻む心臓を押さえ、コナンは声のした方を睨む。だが、その間に灰原はあっさりと浴衣を着直していた。それからサラリと言う。

「続きはなかったわね」

「え、おい」

「じゃ、私が上手くやっておくから、あなたは落ち着いてから来て」  
そういうや否や、タンツと岩場から姿を現した。

「お、灰原！そこにいたのか！」

そして、こんな時に限ってタイミングいい元太。岩場の影でへたり込んだコナンは少し前の誰かさんを習って、盛大な溜息をついた。それから己の大胆さを思い出して冷や汗が出てきた。

あいつ怒ってないかな？

仲直りしたくて話かけたのに、先走りすぎだろ俺！！

やった事といい、そもそもクラブで来た旅行で襲うとか、どう考え  
ても正気の沙汰じゃない。

……いい加減、俺もあいつに壊れてきたって事か？

結局、コナンが戻れるようになった時には花火はほとんど終わって  
いた。

## 命の代償？

帰りの電車内。

海にバーベキュウに花火にトランプやら肝試しまでしたものだから、歩美をはじめ光彦や元太はすっかり寝てしまっていた。

コナンはというと、朝まで心がざわついて一睡も出来なかった。今も隈が出来た目を必死で閉じているのに、隣に座る灰原の肩が振動の度にぶつかってまったく眠れない。一瞬一瞬に伝わる体温が気になってしまふのだ。

光彦を警戒して灰原の隣に座ったのだが、今となっては爆睡している光彦が羨ましいくらいだ。

もう一人の当事者のはずの灰原は席に着くなり、窓の向こうばかり

を見ている。

こいつは平気なのかな？

涼しい横顔にボンヤリとそう思った時、灰原が窓を向いたままポツリと呟いた。

「……昨日はあんな事言っただけ」

「なんの話？」

「岩場の影で『あなたなしには生きていけないから』って言った事」

「え、ああ」

その後の自分を思い出すと恥ずかしい。

「あの時は流されてああ言っただけだね。万が一、あなたに何かあっても私は生き続けるわよ。もしかしたらその先で違う誰かとの子供を産む事もあるかもしれない」

「ああ」

「私にはあの傷よりも消せない過去があって、組織を知る私にしか果たせない責任がある。だから簡単に抜け駆けなんて出来ないし、仮にあなたが密約を破る時があれば敵対も辞さないわ。姉さんが聞かせてくれた陽だまりのように穏やかな世界も、私には縁がなくても構わない」

「それでいいのか？」

「ええ。過去は消えないけど、受け取り方はいくらでも変えられる  
って思い出したの。例え『普通』じゃなくても幸せはあるからね。  
それに……陽だまりにはかりいたら日焼けするわ」

「なんか変わったな」

悲観ではなく言う彼女をぼんやりと評した。

あのあと、歩美と話していたのも何か影響したんだろうか？それは  
それでちょっと妬けるが仕方ない。

だが、そう言うのと灰原は苦笑した。

「違うわ。考え込むのが馬鹿らしくなっただけよ。あんな傷にまで  
欲情してる変態さんを見てたらね」

「へ、変態……」

否定の出来ない言葉を突きつけられてコナンは口ごもった。

ええと、ここは突っ込む所だったのか？

「とにかく、そんな訳だから私はあなたなしには生きていけないな  
んて事はないわよ」

「ふん、それでこそ灰原だよ」

やっぱり、可愛くねー奴。

口調こそ不満そうに見せながら、コナンは微笑えんだ。

どうやら可愛くないなりに吹っ切れてくれたようだ。あの傷も烙印とさえ思わなければいずれ気にしなくなる日もくるはず。やっぱり可愛くないけど。

だが、出会ってから5年も経った灰原はただ可愛くないだけでは終わらないようだ。

座席にぶらりと垂らされたコナンの手にそつと手が添えられた。

頬を染めたコナンが隣を見やると、同じように頬を染めた灰原がいた。この距離で見なければ分からなかったが、微かに隈がでている。

「灰原？」

「それでも、出来る限り、私はあなたと同じ時間を共に歩みたいな  
って思うの。例え線香花火くらいの時間しかなくてもね。いいかし  
ら？」

やっべえ可愛い。ついでに格好良い。

油断した頃に不意打ちってどういっつもりだよ。

そんな事思いながらも、胸を暖かさが広がっていった。



「当たり前ーだ。線香花火どころか、死ぬまで放さねえからな。覚悟しろよ」

重ねられた下で掌を返すと、指を絡ませた。

例え未来に何があっても

この瞬間だけは永遠に繋ぎとめていようよ。

## 命の代償 ？（後書き）

起承転結の「結」です。ですが、あと1話あります。

## 命の代償 おまけ

しばしの穏やかな沈黙の後。突然灰原は溜息をついた。

「あなたと一緒にいると日焼けはしなくても、胸焼けはしそうな事件ばかりで」

「……っておい！やっぱり可愛くない奴だなオメーはよ」

「その可愛げのない私を好きと言った物好きは誰？」

「沢山いるけど、その内でオメーの好きなのが俺」

「大した自信ね」

「オメーの発言も似たようなもんだろ」

「そうじゃなくて、私がいつあなたを好きって言ったの？私はあなたの告白には『ゴメンなさい』『仕方ないわね』『ありがとう』。昨日を足しても『嬉しい』しか言っていないわよ」

「んな……！だって俺がいないと生きていけないって」

「だから、そんな事はないとさっき言った。だから私はあなたを好  
きって言った事なんてないわよ」

「そ、それって、ド、ドウイウコトデスカ？」

「さあ？なんだったかしらね。それを調べるのも探偵じゃない？」

「おい」

「さて、私もそろそろ寝ようかしら」

「おい……………って、無視かよ」

訂正……………こいつはとことん可愛くない。

まあ、その可愛げのなさがたまらなく可愛く見えてしまった俺の負  
けなのだろうが。

そんな事考えているうちに、それまで押し殺していたような灰原の  
呼吸が、規則正しいものになっていた。そっぽ向いていた首もごろ  
りとコナンの肩に寄り添って止まった。

「うわ、本当に寝やがった」

なんつー奴！

……………。

だが、それも少し理解出来るくらい風が気持ちいい。

誰かが開けた窓から潮風が入り込んで髪を撫でている。熱を持った風は冷房の効いた車内では中途半端に交ざるが、そのアンバランスさが安らぎを与えた。

そんな誰かさんに良く似た空気と、隣の寝息、そしてさっきは安眠妨害でしかなかった灰原の体温が、気持ちの良い眠りへと誘う。

ひよっとすると、『あなたなしでは生きていけない』は俺のほうなのかもな。

重すぎる瞼に潰される瞬間。ひっそりとそう思った。

そして皆が起きた頃、手を繋いで熟睡していた2人が騒ぎを呼んだのはまた別の話。

## 命の代償 おまけ（後書き）

長々とすいませんでしたー！

銃創って気にしないのかな？とふと思ったのがキツカケで、短編程度つもりだったんですけど、気がいたら訳が分からなくなっていました。 m ( \_ \_ ) m

一応残しますが、この話はこれで完結です。いままでありがとうございました。

今後は思いっきり反省して、少しでもいいのが作れたらと思います。

side 哀 1 エピローグ プロローグ (前書き)

クロスに続き、また自己満足でやってしまいました。

続けて読んで訳が分からない人の為に説明させていただくと、ここからはside 哀と題打って、先の旅行の哀目線の話になります。

ただ、個人的には「おまけ」での終わり方を気に入っているので、同じ時間軸の違う話と割り切っていただと嬉しいです。

静かになった？

少し目を開けて隣に座る彼の息使いを確認してから、灰原はむくりと起き上がった。どうやら少し寝た振りをした間に彼は寝てしまっ  
たらしい。

1分も寝てないのに、冗談にも気がつかないなんて。寝ぼけたまま  
そう思った時、車内アナウンスを聞いて驚く。

『 まもなく城ヶ崎海岸〜城ヶ崎海岸〜 』

伊豆急下田を出たばかりのつもりが、いつの間にか伊東の近くまで  
来ていたりする。時間で言うと1時間くらいかな。

「……………」

ま、まあそういう事もあるのかしら……。悪かったわね。



コナンの寝顔を謝罪の気持ちを含めて見つめた。握られた手はかきりきつく、抜けそうにない。別に抜くつもりもないけど。

ふふっ。1週間前にはあんなに近づくのが怖かったのに。

恋が脳に与える影響は書籍で学んだけど。あなたが私をこんなにも変えてしまうなんてね。

あなたと出会ってはじめて知ったわ。

それで、寝る前まで話していた事は確か……。

私がいつあなたを好きって言ったの？

ええ、そう。1度も言った事はないわ。だって私はずるいから。

目の前の名探偵さんは事件を解決したら次の事件へと視線を変える。終わった事件、吸収した知識は記憶の中に置き去りにされる。

だから好きって言わないだけ。

もし道を違える日が来ても。迷宮知らずの名探偵の唯一の迷宮入り

となつて彼の記憶に残りたいから。

そんな馬鹿げていて歪な想い。別に彼を信じていない訳じゃない。

ただ、常人とは異なる私の恋愛観。

私が好きと言わない理由はそれだけよ。

それに対して彼、最後になんて言ったっけ？

そ、それって、ド、ドウイウコトデスカ？

ええ、確かこんな感じ。慌てていたわね。

どついつ事……か。まあ、熟睡しているようだし、結論から言つたら

「好きよ。工藤君」

こついつ事かしら？

これは私の記憶に色濃く残るだろう、たった1泊の旅行のお話。

side 哀 1 エピローグ プロローグ (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

もし、本編でこれを繋げたら間延びすると思って切ったんですけど、ずっと載せたかったんですよ。

……どうですかね？ちょっと不安ですが、もしよろしければこれからもお付き合いください。宜しく願いますm) ( ( m

s i d e 哀 2 通り雨 心に留まり (前書き)

文字で遊んでみました。

未遂事件の翌日。

何やっているんだろう

「ただいまー！……おや、哀君はいないのか？」

自分から誘っておいて逃げ出すなんて

「新一と出かけたのかな？一応新一に連絡してみよう」

えっ、冗談でしょ！！

ガタッ！

「博士……」

もう使っていないはずの地下室から出てきた灰原に博士は驚いた。

「おや、哀君。部屋にもいないからどこ行ったかと思ったよ」

「地下室で探し物をしていただけよ」

「そういえば昨日は新一と映画を観に行ったよっじゃが」

「ええ。ありきたりでつまらなかったわ」

「哀君？」

「……ちよつと風邪引いたみたい。だから寝るわ。おやすみなさい」  
昼過ぎから何も食べていなかったが、とてもそういう気分じゃない。  
とりあえずやり過ごせたと、灰原は自室へ戻ってしまった。

だが、やり過ごせたと思ったのは本人だけであり、博士は眉間に皺を寄せて天井を見上げて咳く。

「これは新一と何かあったかの？」

気にはなるが手出しはしない。そうした好意が彼女のプライドに触れて、もっとややこしくなるなんて事は分かりきっていたのだ。

通り雨、心に留まり

「雨。降ってたんだ」

何故かしら。

泣きそうな時に雨が降ると、一緒に泣いてくれている気がする。

きっと自分中心の世界しか見えなくなるからね。

所詮、雨は雲の中で体積が大きくなった水の粒が重力に引かれて落ちる降水現象に過ぎない。

（大丈夫。私は冷静よ）

そうじゃなきゃいけない。明日には平気な顔をして部室に集合しなきゃいけないから。

（だってもっと嫌な事だって、沢山あったじゃない）

そう。組織にいた頃なんて世界の全てが……

……！！

そうか……

気付いてしまった。

私が昨日彼を拒絶した本当の理由を。

蘭さんの顔が浮かんだ以外は自分でも訳が分からなくて、1日伏せている間に、彼女にはない傷を見られたくないのだと思った。

違う。それだけじゃない。

これはベレッタM1934が最後に撃ち抜いた銃創<sup>ジン</sup>。

傷が想起させる過去が、この先自分にはついて回る。

例えばAPT X4869を服薬した人物のデータとあの名簿の横に付いた死亡の文字。あの名簿の数だけの罪が、傷を覆う薄い皮の向こうから覗いている。そんな様子を彼にも見られる気がした。

それが急に怖くなった。

でも実際にあるのは歪に窪んだ醜い肉の塊だけ。

鏡を見る度に確認していたから間違いない。鏡は過去の闇を映してなかった。

過去の闇を映しているのは最初から自分の心。

(いつかは話さないといけないわよね。この心の中身も)



拒絶した理由を言ったらどうするかしら？

まさかとつくに変わっていると思っていた私が、未だに無様な心のままだと知って。彼も裏切られたと思うかしら？

バーローとかも言われそうね。「傷は傷。そんな事ある訳ねえだろ」「いつまでもくだらない事を考えてんじゃねえ」とか。

それはそうよね。嫌われたとしても甘んじて受けるべきだわ。

彼女は自分に強く言い聞かせると、タオルケットに無理やり頭を押し込んで寝ようとした。だが、昨日も一睡もしていないのに、出所の分からない恐怖に眠る事は出来なかった。

何故なら………

彼女は気付いていなかったが、彼女が考えた新一の言葉がそのまま一番言われると怖い言葉だったからだ。自分の口から言ったそれでも気付かぬ内に心を抉っていた。

かつて、世界は彼女にやさしくなかった。

だから、世界の条理を狂わす薬の開発に全てを投げ打った。

それも無駄と知ってからは全てを止めようとして。

そんな時に突然世界は手のひらを返した。

でも、やさしくなった世界に身を置くのは世界を嫌っていた自分。

世界の違和感に戸惑いながら今日まで歩いてきて、でも目に映るものを無条件にはまだ信じられなくて。

そんな彼女を一番近くで見て「好き」と言ってくれた工藤新一。世界が手のひらを返したように見えた要因の1人。もし彼がそんな彼女を在り方馬鹿にするのであれば、彼女は音を立てず静かに壊れていくだろう。

それが出所の分からない恐怖の正体。

side 哀 2 通り雨、心に留まり（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

このside 哀の裏テーマは「3歩下がって3歩進んで3歩下がる。でもまた進む」「私的黒の組織考察」です。後者はあまり書けないかな……。でも密約とか意味深な言葉は「命の代償」で使ったので、そこらへんの補完が目標の1つです。  
もともとが駄文の上に更にややこしくしてごめんなさい。

Side 哀 3 旅行計画

1日目

午前 6時 出発

午前 11時 コテージ到着 + 昼食

午前 12時 海水浴等、自由行動

午後 5時 集合 バーベキュー

食後 花火

随時 就寝

2日目

午前 7時 朝食

午前 10時 チェックアウト

午後 4時 解散

「どうですか？」

「「「「「……………」」」」」」

前回、部室でなんとなく話していた「皆で旅行に行こう！」話。あの時はよくある企画倒れだと思って盛り上がったが、さすがは光彦君。1学期で部活を立ち上げた力量を舐めていたわ。ってこの行く日ってすぐじゃない。

多分、私以外の3人も啞然としているから、考えている事は同じ。

蒸籠の香りな夏。磯の香りに憧れもあれど、すぐ行けるかといえは複雑だ。

「一応キープしてもらっていると行って、まだ正式な予約じゃないので、ここでキャンセルしてもお金は掛かりません」

いや、そう言われても……。あからさまにキャンセルし辛いのは分かかって言っているのだろっ。

だったら

「私、パス」

海でしょ？見られるのが嫌でああなったのに、勘弁してよ。

だが、光彦は慌てて首を振った。

「いえ、コテージを借りる事になるので、今回は全員が行くか、キヤンセルするかを選択肢しかないんです」

ふざけてるの？

ますます選択肢がないじゃない。

本当に、光彦君は策士になったわね。

彼は次、にいまいち行く気になりきれない工藤君と元太君の間に顔を突っ込んだ。俗に言う抱き込み作戦。

「いいですか、2人とも。歩美ちゃんと灰原さんと海に行くんですよ。女子高生になった2人の水着姿なんて帝丹高校の憧れの的だといつのに、乗り気じゃないという理由だけで企画倒れにするつもりですか？」

……張り切っている理由はやっぱりそれか。

そういう事はもっと小さい声で話さないよ。歩美には届いてないみたいけど、私には聞こえているわよ。

だけど、その間に工藤君のやる気スイッチに火が着いた。

「いいだろう。行こう。光彦がこんなに企画してくれたんだし。なあ、灰原」

え、私？

思わず振り向いた。

正面には工藤君の顔。一瞬目が輝いたと思ったたらすぐに悲しそうな顔になって元に戻った。

……

多分、考えている事は分かる。あれからはお互い距離をとったから目が合ったのは2日ぶり。嬉しいけど、そんな事を嬉しく思える距離感が悲しい。多分そんな所。

「ごめんなさい。」

「哀ちゃん、無理しなくてもいいよ」  
「え？」

隣で歩美が助け舟を出した。

そう言われてはつとした。無理をしているのは私なんかじゃない。工藤君だ。この状況を変えたくて私を誘ってくれたのに、何しているんだろ。

「大丈夫よ。別に家にいる以外に用事もない訳だし。行きましよう、旅行」

嫌われるなら、もうそれでいい。耐えられるから。でも、苦しめちゃダメだ。

そんな事ばかり考えていた。



帰り道。

「ねえ、喧嘩したでしょ」

「え？……ええ」

厳密には喧嘩ではないのだけど……  
あれまで説明するのは気が引けた。

「哀ちゃんとコナン君ってクールぶってるけど、そういうのはすぐ出るよね」

「悪かったわね」

「可愛いつて言っているの！」

歩美は私達の関係を知っている。というか、私達がこうなれたのも彼女のおかげが大きかったりする。工藤君は知らないけど。

「で、仲直りできそう？」

「どうかしらね？」

「哀ちゃんそんなに怒ってるの！？」

「え、私？」

「だってコナン君、ずっと顔色伺ってたじゃない」

工藤君……。

「そうね。でも私も怒っている訳じゃないから」

「よかった。だったらすぐ仲直りできるね……………あ！あれ、博士と同じ車！」

「え？違うわよ。あれは……………」

歩美が指を差したのはビールではなかった。

あれは……………！

おまえ知ってるか、ドイツの雨がえるって

ジンと同じポルシェ。

見る。随分磨いたんだぜ

でも、見てももう何も感じないのね。

「どうしたの、哀ちゃん？」

「あれは似ているけどポルシェよ」

それからは関係のない話題だけを重ねて、私は帰宅した。

そして、部屋の枕に頭から押し付けて、ようやく肩の力を抜いた。

何やっているんだろう。

部室へ行くなり、「旅行のしおり」を手渡されて大分混乱していた気がする。

だから旅行に行く事は決まったけど、それ以外は1つしか覚えていない。

私が態度を決めないだけで彼を苦しめ続けているという事。

でも……相変わらず、「彼に自分が拒んだ理由を話す自分」のイメージが描けない。

やらなきゃいけないって分かっているのに……。

最低ね、私。

誰かと仲良くなると思ったらず振り回してしまっ。

side 哀 4 アマガエル（後書き）

人の心の揺らぎを書こうと思ったからなんですけど、だんだんと更新がしんどくなりました。前ははまだ元気だったのに、これ？と思っただ方はごめんなさい。でも理由は後半で分かるようにします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0973m/>

---

命の代償+

2010年10月17日04時15分発行